流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和五年十月句会（第一三七回）

兼 題　［秋晴れ］
開催日　令和五年十月二十八日
開催場所　生涯学習センター
出席者　七名
投句者・選句者　七名

（六 点 句）

●秋日和割れ煎ひとつ齧りけり　玄 鳥

選評…秋の澄んだ空気に煎餅の音がパリッと響きお米の香りも漂います。日常のひと時を力むことなく流れるように詠み、句全体が穏やかな秋に包まれいて良い句だと思いました。（寿 歩 記）

（三 点 句）

●駆けっこの子らに等しく秋の晴れ　寿 歩

選評…運動会の情景が浮かび、子供たちへの優しい眼差しが感じられます。平仮名を多く使い、ゆっくりとした調べになっているところが良い点です。（玄 鳥 記）

●秋晴や谷中裏なる寺巡る　小 牧

選評…谷中は寺の多い町である。何人かの有名人が眠る谷中霊園もある。谷中という地名を出すことで、秋晴れの一日寺を巡って散策する映像が確かなものになった。（夢 心 記）

●秋晴れに君の笑顔が六十年　艸 寛

選評…「いいですね。」笑顔、それも六十年も愛している貴女のほほ笑み、秋の澄み切った空の青、しあわせの俳句です。（互 酬 記）

●銅剣の眠る山塊朝寒し　玄 鳥

選評…弥生時代の銅剣が埋もれているとされる山塊にやって来たが、辺りは人の気配もなく只森閑として山は眠っている。作者は銅剣が眠ってきた果てしない長い年月を思い、自分の越し方も含めいろいろな感慨を抱いたのであろう。時間・空間の広がりがあり、含蓄を持った佳句である。季語の「朝寒し」が効いている。（徹 心 記）

●赤とんぼ乗りし帽子はぶどう色　寿 歩

選評…通常の秋に比べれば、赤とんぼの出演は極めて少ない年でしたが、それでも作者の帽子には、赤とんぼが止まりました。その帽子は、ブドウと同じ色でした。何となくにっこりしたくなる句です。（艸 寛 記）

（二 点 句）

あの猛暑何ごとも無き秋の空　**互 酬**

（一 点 句）

秋日和猫等巴で眠りおり　徹 心
米の香が稲架木（はさき）漂う黄色帯び　**艸 寛**
枯薄（すすき）夕暮れ化粧はおしろいに　**艸 寛**
五年経ち薬無くなり温め酒　**小 牧**
老い散歩草の間あまた草の花　**寿 歩**

（投 句）

秋晴れのリフトに杖の媼かな　玄 鳥
秋晴れを憂しとぞ思う猛暑かな　夢 心
秋晴れや空の青さかフェルメール　互 酬
秋晴れに新規チャレンジ推されたり　徹 心
糸瓜花天に向かって咲きにけり　夢 心
俳画にと真綿にくるみ通草着く　小 牧
ガザ・ゴソとまた西方で炎える秋　互 酬
盈月（えいげつ）がき月に替わる月見詰め　徹 心
驟雨去り甦りたる虫の声　夢 心

『句 会 後 記』

今月は三名から選ばれた秀句が出たり、三点句が五名出たりと、興味深い結果になりました。また、かねてより懸案だった投句の件が暫定的ではありますが四句に増やしてみることになりました。一句の効用がどう反映されるか興味深いところです。（小 牧 記）